第４回　高知県建築文化賞　講評

審査委員長　布野　修司

知事賞（最優秀賞）は、「豊永郷民俗資料館」で文句なし。対抗は、中土佐町津波避難タワー。いずれも完成度が高い。シンプルで明快な構造。構造設計は、同じ構造設計者である。豊永郷民俗資料館は、絶好の立地にある。同じ設計者による既存建物と調和し、景観の中に新たな点景を創りだしている。「肘木構法」と呼ばれるらしいが、新たな架構方式として、既に定評がある。木造架構の醍醐味を味わうことができる。蓑風瓦製腰壁や金属製の目地など、伝統的な構法や地域産材を伝統的に使用する構えは全くない。むしろ、モダニズムのデザイン感覚である。ディテールも手堅い。木造建築で、全て木質で仕上げると、いささか圧迫感を感じるし、飽きも感じるが、天井の黒漆喰が効いている。

優秀賞の「中土佐町津波避難タワー」は、県民審査賞でもあるが、第一に評価すべきは、津波への建築構造的対応を十分考慮しながらシンボリックな形態にある。また、当然であるが、被災時についての十分なシミュレーションをもとに、細かな配慮がなされているのも評価できる。さらに、住民に親しまれ日常的に使われているのがいい。凡庸な津波避難タワーが各地に建てられる中で、モデルになって欲しい作品である。

優秀賞として、さらに、「土佐清水の教会」と「ハイルーフの家」を選んだ。土佐清水の教会とハイルーフの家は、いずれも40歳代で、第3回高知県建築文化賞の受賞経験者でもあるということで、優秀賞に値するかどうかが議論になったが、土佐清水の教会、ハイルーフの家ともに水準の高い作品である。そして、共に、敷地を公共に開く点は高く評価できる。さらなる活躍への期待を込めて、２作品とも優秀賞とした。

木造文化賞、土佐甍賞に値するのは、豊永郷民族資料館、土佐町町営住宅・舞田団地である。そこで、重賞となるが、木造文化賞は、「豊永郷民族資料館」が最もふさわしいとし、「土佐町町営住宅・舞田団地」を土佐甍賞とすることとした。

土佐甍賞の土佐町町営住宅・舞田団地は、高齢者向けの公営住宅として、プログラム、千鳥配置など評価をめぐって議論はあるが、環境共生住宅のモデルとなることをめざす意欲的な作品である。

40歳以下を対象とする新人賞は、「継ぎの家」、「対の家」、「Tei」の３作品である。

継ぎの家は、建替えであるが、建替え前の住宅の記憶を様々なレベルで継承しようとするアプローチに可能性をもつ。対の家は、狭小間口で奥行の深い土地に建つ都市型住宅のプロトタイプとなりうる可能性をもつ。中庭に余裕がないのがやや気になるが、ユニークな平面構成になっている。Teiは、郊外の丘陵の傾斜地の、土佐湾を望む絶好の敷地に建つ。景観を充分享受することを意識した設計意図は明快で、屋内外をつなぐ手法に可能性をもつ。以上、それぞれの可能性に今後期待したく、今回は3作品とも新人賞とすることと判断した。

審査委員　高橋　晶子

今年は偶然にも、別の県の現地審査を本賞の審査直後に行ったため、高知の建築潮流として知られる「土佐派」の存在をあらためて感じました。勾配 4 寸以上の切妻瓦葺屋根。土佐漆喰の真壁とし、簡素な屋根架構をあらわす、ちょっとお堂を連想する内部。伝統的な住宅が培った事物の関係性を見据えながら現代の暮らしに繋げています。流儀として共有されながら建築家の個性も表出し、世代更新しながら発展的に継がれてゆく、土佐派のビジョンそのものに高知らしさを感じました。

独自の解法・デザインを展開した作品群については、各々の発見的視点を評価しました。以下、入賞作品のコメントです。

■　県知事賞（最優秀賞）・木造文化賞

「豊永郷民族資料館」は、山間の絶景を臨む常福寺に隣接して建つ 2 棟の木造建築。中央に独立して立つ 8 寸角の柱と縦横に飛ぶ貫がなんといっても印象的。空間に気合を与え上空からの光をうけヒロイックな存在となっている。民俗資料館という用途に沿いながら建築の原初的な力を発現した作品、文句なしに決まった。

■　優秀賞

「中土佐町避難タワー」は、展望台として日常的に使われていることがまず評価された。丸いかたち（架構は８角形）は漂流物の衝撃緩和に有利で、とりつく斜路も折れ曲がりなく歩きやすい合理性をもつことが本作からよく理解できた。

「土佐清水の教会」は、日常生活に寄り添う優しい空間。日々の生活と祈りが一体化するように、ドラマチックな造形を避けシンプルな方形屋根の架構を露した内部は、ハイサイドからの間接光にデリケートに呼応し、建具の選別によって現象の質が変化する。庭のような駐車場も美しい。

「ハイルーフの家」は、良好な環境に伸びやかに建つ住宅。4m弱の車庫の屋根を細い鉄骨柱で軽やかに浮かせた表情が印象的である。街並景観にゆとりを感じるのはもちろん、多様な有効活用ができそうだと思う。

■　土佐甍賞

「土佐町町営住宅・舞田団地」は、各住戸を千鳥配置したことでできた路地空間が新鮮。住戸同士の軒を繋ぐ横架材が領域性を強めている。陽当り優先の平行配置に対し千鳥配置は斜め方向に視線が抜け奥行き感が増す。

■　新人賞

「継ぎの家」は、かたちに知性が宿り説得力がある住宅である。周辺に残る歴史的環境との関連、南側の山に向かう敷地、気候、住まい手の生活などを丁寧に受け止めながら統合化された結果、美しいプロポーションと細部の納まりを備えた作品に仕上がった。

「対の家」は、間口 6mを細長く 3 分割して中庭（空を見る額縁）をとり、ボリュームは二連の家型とする構成。密集住宅地にあって視線、陽光・明るさ、風、圧迫感などの調停の仕方が個性的表現につながっている。

「Tei」は、海の絶景を臨む高台に建つ住宅。景色がよいと一般にどこも開放的になりがちだが、この作品は１万冊の書庫が内向する場となり、読書デッキがことさら印象深い場所と感じられる。

審査委員　渡辺　菊眞

一昨年に引き続き、二度目の審査となるが、今回の要項（審査基準も）には「地域性、歴史性、文化性」を建築にて表現することが重要だと明記され、その上で新たな可能性をいかに切り開くかも問われていた。いまや日本全国に数多くある地域の建築賞ではあるが、この手の賞が中央の単なる劣化版や植民地化に堕さないためにも、このような指針や評価基準は極めて重要なことだと思う（それをどう評価するか、それがパターン化しないかなど、審査の目が強く問われもするのだが）。備忘録を兼ねて、まずは、このことを記させていただいた。以下には受賞作品について簡単なコメントを付したい。

■　県知事賞（最優秀賞）・木造文化賞

「豊永郷民俗資料館」は、山岳寺院の一画の秘境的な絶景が開ける場所に建つ。その秘境性を、中央の力強い木組みが形成する吹き抜け空間に結晶させたかのような建築である。上田建築事務所の「お家芸」ともいえる大仏様（重源がものした様式のこと、天竺様ともいう）から着想を得た豪快な木組みが、建物の心臓部を形成し、民族資料館という機能と空間に完全にマッチしている。まさに横綱が横綱相撲をとったといえる建築だ。現在展示準備中ではあるが、展示中の様態が見られなかったのが心残りである。

■　優秀賞

「中土佐町避難タワー」は、即物的な避難タワーではなく、町のシンボルとして、平常時から展望台として使われる様態として、さらには（当たり前だが）津波荷重をより受け流すカタチとして計画されたことが重要である。今後も無機的に量産を続ける避難タワーを啓蒙する存在として評価したい。「土佐清水の教会」は、教義にならい、「家庭的で開かれた」存在としての教会が目指されており、それが具現化している。強すぎない求心性、それを包む緑地。町のスケールとの親和性。この、およそ宗教的劇性がないことが、ここでは大切なのだ。信者の要望から、教会の床に暖かみあるフローリングが設置されていたが、そんな家庭的な一コマもこの教会の魅力であろう。「ハイルーフの家」は、広大な新興住宅地の一画。そこの比較的大きな宅地割りの中に伸びやかに建つ。南面の庭と傾斜する一枚屋根の少し縮こまったスケール感。それに対して前面道路側に伸びるハイルーフの浮遊感。そのバランスが心地いい。

■　土佐甍賞

「土佐町町営住宅・舞田団地」は千鳥配置の群としての風景形成に、この手の計画のプロトタイプの可能性を感じた。低い屋根が千鳥に連なり瓦の「まちなみ」をつくる。甍賞の由縁である。桁をつなぐことで生じるゲートつきの路地にも可能性を感じた。

■　新人賞

「継の家」は、条件の悪い立地ながら、その特質を丁寧に読み解き、極めて落ち着いた心休まる建築をつくりあげている。おそらくは増築だらけの前身建物に、この計画の平面的ヒントがあったに違いない。新人とは思えない「老成」した細部は今後が楽しみでもあり不安でもある。独自の表現昇華に期待したい。「対の家」は、何らよるべきところのない新興住宅地の一画にある建物。しかも間口が狭く奥行きが深い。前面道路に対してはスクリーンとなる壁で、閉じた落ち着いた空間を確保し、後方の空間は中央背骨にガラススクリーンにつつまれた中庭をとり、回遊空間としている。こういった立地における新たな型を予感させる家である。「Tei」は、絶好のロケーションにたち、それに反応した瀟洒な作品。「海がきれい」、それにつきてしまう部分もある。平面構成、断面構成の練り上げに今後は期待したい。